

歴 実

英雄豪傑文人學者に論なく、苟も其の出處言行の傳ふべきものは、精緻曲寫して遺憾なからんことを期す、其他小は一事一物の沿革より、大は世界邦國の事蹟に及ぶ、皆有益にして多趣なり、

那破翁大帝

戸川 殘花

小引

一將功成萬骨枯とは既に陳腐の套語なり、ナポレオンは貳百萬人の血を流して歐洲の野に戰勝の凱歌を唱へり、渠の功業は僅に數萬の鮮血を以て購ひ得たる者にあらざ、渠は武を驕せしか然り武を驕したり、渠は止戈の功を立てしか、然り止戈の功を立てしなり、渠には撥亂の技も有り反正の量も有り、渠は武將なり亦た良將なり、帝王として仰ぐ可し將帥として従ふ可し、渠はコーライルの評せし如く手に榴散彈の鞭を執れど、また法典を編集する爲には黄金のペンをも取れり、渠は中天の日の如し、之に對すれば直視すると能はず其光輝に眩惑せざる者なしと雖も、仔細に觀測すれば燦爛たる光輝の底には厭惡す可き暗黒の大點を有するとを見るなり、嗚呼渠は光暗の兩邊を一身に

具して、かの衆盲が品評に任せ高く天上より下界の蠢爾たる學者政治家を嘲笑するが如し、抑、英雄を品評する時は其一代の功業如何んを視る可し徒らに其失敗欠點の跡のみを採る可らず、ナポレオンの如き英雄は世の腐儒村學の口吻に倣ひ、他を律するに圓満具足の空想を以てせず、己も亦た圓満具足の空想は暮はざるなり、眼あり鼻ある人として誰か圓満具足の域に達せし者あらんや、圓満具足は必竟哲人法士の夢幻境に外ならざるなり、ナポレオンは希臘のユバミノデスよりアレリック第二に至るまで渠と比肩す可き將軍なし、シュリアス、シーザーの如きアレキサンドルの如きは其力量渠に譲らずと雖も、如何にせむ千載の往古にして其事跡を知ると少し、況んやリシエリウの如きをヤウエリントンの如きをヤ、日を同うして談ず可きに非ず、渠に反對せしメタルニヒさへも、「ナ」は軍人として大なる如く政治家として大なり、政治家として大なる如く君主としても大なりと評せり、「ナ」は兵法に政治に事務に天稟

の大才を有せり、渠は勢力の化身なり權化なりき、古今東西の武將を考ふるに武あれば文なく文あれば武なく北方の強と南方の強とは併行をなし難く戰陣の天才と智能の天賦とは共に有し難し、獨り此の定則の圈外に逸するはナポレオン大帝あるのみなり、渠は技藝、文學、科學を批評する眼識あり、論議に人を動かす力あり、風采容貌には人の感情を射る力あり、其擧笑には他を殺活する微妙の能を有す、行文亦た頗る簡潔明亮にして力ありき、渠は一家團樂の時には食卓の主人公となり談笑を肆にして時には諧謔の言を弄するとあり、女子に接するには温和にして禮讓を亂さず、されど時には皇后ヨセフヒン或は其侍女に戯むるに物陰より聲を作りて嚇すことあり、又は自ら出納簿を検して皇后の負債を整理するとあれど或時は皇后が夥しく寶玉を買ふも更に意に介せざるともありき、其身躰亦た強健にして馬上に十六時間或は十七時間を送るも困憊せず、數日眠食を廢するも疲倦せず、日常の食卓も美味を欲せず多量を食らず、恰も鐵石の如き人なりき、恒に其勤勉を誇りて余が金鐵の手は上臂に附着せず直ちに頭

に接せりと曰へり、又斯の人に於て宗教を談論し、唯物論者を斥け、頗る天運、命運的の言に信を置けり、閃光燦爛として容易に其真相を摸索す可からず、渠は八方美人なりと雖も我よりして他に媚を呈するに非ず、彼よりして我に媚を獻せしむるなり、渠は世界の偶像となれり、宜なる哉ユンヨルドの上人エモルソンすらも大帝を評して世界第一の人と爲せり。然りと雖もエモルソンが世界の二字に注目せよ、師は世界と云へり元より「ナ」を靈界の人とは評せず、亞聖とも大賢とも評せず、渠は世界的に成功せし者なりき、當世の人なり十九世紀の人なり、歐洲幾多の小ナポレオンより集合せし大ナポレオンなり、日夕致々汲々として事業に熱中する歐人の意思を代表せし者なり、渠は都市を壯麗に飾り、道路を平坦に造り、公園を修築し、交際場裏の趣味を豪奢になし、圖書を集め、華衣を着し、宴會を盛んに爲し、無數の婢僕を役し、美術音樂を奨勵し、宮殿を作れり、皆是れ十九世紀の開明的人士が見て以て快哉と叫ぶ所の物なりき、渠は高尚の理想を解する者と雖も超然的空想を慕ふ者に非

ず、軍を行くも兵を接するも數學的なり、渠は天才の將軍なれど勝算を奇策に求めず、確然たる數理より割り出したる正法より博し得たるなり、世の見て奇變と稱し神出鬼没と贊するは渠に於ては奇變の術に非ず、冷然たる算數的の胸算より生じ來たりしものなり。「ナ」は以太利人の血統なり、頗るナルタークの英雄に近し内は名譽に熱中すれど、

外は冷靜にして持重し、成功には心を動かさず失敗には分秒の機に應じ禍を避けて福と爲すの智能ありき。渠は僞言者なり、鮮血に飽かざる者なり、猜疑心深くして鍵の穴に耳をあて、密に他の書狀を開き狹量にして人を容れず利益と恐怖の二術を以て人を御し恰も第六天の魔王が人身となりて歐洲無辜の蒼生を殺し佛國にさへ餘毒を百載の末に流せし如くに酷評罵詈する者多し、然り



載の末に流せし如くに酷評罵詈する者多し、然り

載の末に流せし如くに酷評罵詈する者多し、然り

と雖も賞賛も批難も其一方を見し者のみにて、英佛二國の記者に由り全く褒貶を異にするとの多きは世の知る所なり、況んや大帝の性行を知ること少なき我が國民は崇拜も爲さず批難も爲さず、ナポレオンとは豊公の如き人なりとのみ思ふ者も少なからず、近頃米國センチュリー雜誌にスロイン氏のナポレオン傳あり、殆んど三年間を連載し聲譽噴くたり、氏は米國人が今日ナポレオンを知るの必要あることを論じたり、我が國の如きは未だ米國と同じ社會の趨向に非らずと雖も離斷たる斗筭の小人のみ翺翔する今日なれば、大帝により英雄の面目を知ると亦た可ならずや、惜むらくは筆端硬澁にして大帝を小帝に爲すの恨あるのみ。

コルシカの卷

コルシカ島は三千三百七十七平方里の島なり、(我北海道よりは小)島としては地中海に於てシ、リ、サルマニヤに續ぎ昔しセネカが諸居となりしより世に知られたる所なりき、特にルイノーが預言にて歐洲に平和を與へ律法を設け運動を發すに適せし命運を有する地なりと傳へられしより、列國の注意は藪爾たるこの孤

島に向けられぬ、果然十八世紀の末に至りコルシカは世界に關する一大劇の幕を落とせり、第一に登場せしはコルシカの愛國者バスカル、バオリなり、第二に登場せしは島の名族カルロ、ポナバルテの子ナポレオン、ポナバルテなりき、由來島國人は大陸を控御するの力あるか。

コルシカには島の東西に亘る一大山脈あり、東方は山勢緩く其地最も豊饒にして中世より伊太利と交通し住民も亦た西部より富み百事自由を尊みたり、之に反し西方は礪確の地にして頗る封建的の氣象を帯び其血は佛蘭西、西班牙を混合し遠く希臘、羅馬、或は亞拉比亞、チュートン人種より淵源せり、地勢の關係より東部の人民に權力あれど全島は種々の特色ある人種と、生産に由りて分れたり、されど住民の多數は伊太利人種にして貿易、學藝より母國の風習氣節を移し來ると雖も島民の七分は、耕牧を業と爲せば歐洲大陸の進歩には伴なはれざりき、其政府は自治體の組織なれど國小なれば獨立せず、希臘、羅馬、回教主、ヒサ、ヂエノアに屬し、ナポレオン誕生の當時は佛國に屬せり。コルシカは斯く他國に屬すると雖も、其民は孤峻慄悍にして屢々叛旗を飄へし、コルシカは世として義士烈

士の跡を斷つことなく常に愛國者の名を歐洲に轟かしたり、十六世紀のサンピエロ、十八世紀のバオリの如きは鐵中の尤も錚々たる者なりき、嗚呼英雄は英雄より生ず、このコルシカにナポレオンは生れて幼時の感化教育を受けしなり、抑、ポナバルテの家系は大帝に媚びんが爲め矯飾せられしこと多く或は古帝王の血統と稱し或は希臘人と稱し亞拉比亞人と稱し其系統を古代に附會すれど、實は伊太利人にして恐らくは爵位ありし家ならんと云ふ、古るくは伊國タスカニー州サルザナに住せしと見え其地方には同姓の家ありと云ふ、ポナバルテ家はアマヤシオ府に住み其家富まざると雖も市政に關し土地を有し加ふるに伊太利人種なればヂエノア政府よりも家聲の爲に重きを置かれたり、祖父はヨセフ、ポナバルテ、父はカルロ、ポナバルテ、母はレチチア、ラモリノと稱せり、父は兎も角も一地方の名族なれども母レチチアは卑賤の女子なり、然れど其容姿頗る艶麗なりしかば門地を問はずして娶りしなり、時は千七百六十四年、カルロの齡十八、レチチアの齡は十五なりき。この婚姻の後アマヤシオを去りてコルテに住せり、當時コルシカはヂエノア政府より佛國に譲り頗る自治の政躰を妨害せられ、かのバオリは首とし

て反抗し終に自由を得んが爲に英國政府の助力を請ふに至れり、カルロはバオリの爲に書記に任じ頗る力を致せしが事の爲す可からざるを見て自ら衆に先んじ佛のマルアウフ、ウー二將軍の下に降れり、其性質を考ふるにバオリ一派の如き剛直不撓の人に非ずと雖も紳士の風采は具へしと覺ゆ、祖先の遺傳は長壽を保たず三十九年にして世を逝れり、これに反し母レチチアはコルシカの平民なれば屈強の婦人にして八十六の高齡に達し國母と仰がれて没せり。

カルロ、ポナバルテの子女は十三人ありき、千七百六十五年に生れし長男は早世し、千七百六十七年に生れし長女マリー、アンも早世し、千七百六十八年に生れしヨセフなり、(後に西班牙王となり温良の君と仰がる)即チナポレオン大帝の兄なり、千七百六十九年に生れしはナポレオンなり、この他に九人の子女あり、其六人はルーシエン、ルイ、ヨエロム、タスカニー大公の夫人となりしエリス、ボルグス殿下の妃となりしパウライン、チーアル王即ムラーの妻となりしカルロッタなりき。ナポレオンの父母も亦た他の英雄の父母の如く其子の光輝により非凡の人と評する者も少なからざれど、決して大帝の親として恥ぢざる父母にあらず、父カルロ

は前にも述べし如く普通の紳士にして嘗て伊太利ピサの學校にて法律を學び辯論の才も有したれども、母レチチアは剛氣の婦人なり質朴なりとの評あるのみ、されど客を遇するとは極めて懇篤にして、佛將マルブッ伯の如きも賓客中の一人にて常に親しく往來し、爲にナポレオンは佛將の子なりと云ふ浮説を聞くに至れりと雖も、其事の流言なりしは疑ふ可からず。

ナポレオンの誕生には其年月に二三の異説ありと雖も、千七百六十九年八月十五日にアマヤシオに於て生れしを以て正確と爲す(我が明和七年なり後櫻町帝の御世にして徳川九代の將軍家重公の時に當る)前に述べレバオリと佛國の間に起りし内亂は此歳の五月に平定せしことなれば、ナポレオンは恰も母の胎中にありて騷亂の時には夫カルロに抱かれ馬上にて辛く難を脱がれしこともありしとぞ、亦以て大帝の胎教は劍光砲火の中に成りしと云ふ可きなり、渠も嘗て我は我が搖籃を失望の涙と壓制の呻吟にて圍まれ、三萬の佛人の血を以て自由の王位を濼せよ我が國の死せし時に我は生れたりと云ひしことあり。

渠は基督教の式に従ひナポレオンと命名せられぬ、この名は何時何如なる聖徒の名なるか分明ならず、また

其名のナポレオンも其姓のボナバルテの發音も種々に發音せられ今茲に邦語を以て別たむは煩しければ擧げずと雖も伊、佛、英の三國音により其時代に由りて一様ならざるなり。

ボナバルテ家の當時は富榮ならず、妻レチチアの資産は一小屋と狭少の葡萄園にして、夫カルロは世襲の田地も質入なし不動産の頼る可きものなく、僅なる妻の資産によりて生活し或は稅務の吏となり議員となり、其家計の爲に力となりしは叔父リウシアン、ボナバルテと云へるアマヤシオの天主教の大執事なりき、またマルブッ伯も内外に友誼の誠を盡し、一家は辛くして名族の面目を保ちしとぞ。

ナポレオンは大叔父リウシアンより天主教の教理問答聖經略史を學び、先づ宗教的教育を受け、伯父フェシユより文字を習ひ、後に女學校に通學せしがマルブッ伯の斡旋に由り公費を以て佛國アリエンヌの陸軍學校に入る、ナポレオンが十歳の時に當れり、渠は斯く幼稚の時より早く他郷に出でたりと雖も、生れてより十歳に至るまでコルシカ氣風の十分の教育を受けたり、世は皆なツロンの役を以て渠が初陣の手柄と思ひ偏に隆盛の時のみを喋々すれど、ナポレオンが心膽を練り

世故の經驗を積みしは十年間のコルシカの空氣と、十四年間南北に奔走せし苦辛の結果たることを忘るゝ勿れ、實にコルシカは渠が幼時に佛國の抑壓を受け、義士バオリは國外に放たれ鬱勃沈痛の殺氣は全島に彌蔓し遙かにバオリの聲援を將て日夜に破裂の機を窺ひたり、この肅殺の空氣に人と成り常に自由恢復の聲を耳にして生長せしなり、加ふるに父カルロは渠が十六の時に世を逝り、兄シヨセフは僅に十七にして家亦寒貧なりき、渠は歐洲の野に大軍と戦はざるに、先づ貧苦と闘ひしと知る可し。ナポレオンはアリエンヌの入學に先だちアウトアンに留り三ヶ月間佛語を學べり、此時父に従ひフロレンスよりマルセイルを過ぎ來りしが、途次の見聞により既に思想の變化を起し又昨日の幼童ならず、寡言深思の少年となりぬ、アウトアン校には貴族の子弟多く少年と雖も財囊豊なれば自から驕豪をまねかれず、渠は子然この貴公子の中に立ち、蒼白の容貌、鬚々たる頭髮、瘦せて見る可き容姿なく、あまつさへ未だ佛語に嫻はず默然として逍遙するのみ、一人も渠と遊戯を借に爲す者なし、渠はコルシカの少年にして未だ佛國の人ならず衷情鬱々として怨を佛國に報ひむと欲す、嗚呼虎兇は猛牛を搏つの氣あり、或時校友の

一人は渠に對してコルシカの怯懦なるを嘲る、其時渠は慷慨の色を面に現すと雖も、語氣敢て迫まらず「四人に對する一人ならばコルシカは奮はれずと雖も、十人に對する一人なりき」と答へぬ、其友は又た「左りながら立派なる將軍バオリを持てり」と云ひし時、渠は悲壯の音調をもて「然り余はバオリに倣はむとを願ふ」と答へしとかや、渠は當時十歳の幼童なりしとを記憶せよ。

渠はアリエンヌの學校に入る、この材も亦寒族の子弟の學ぶ可き所に非ず、今はナポレオンと遊ぶ友もなく語る可き者もなし、日々に不愉快なるは群童が我を嘲けり我を指さして笑ふことなり、渠は茲に來りて益々悲憤に堪えず或時一室に佛將シヨアソールの畫像を見て奮然拳を振ひて寸裂に爲したり、かゝる舉動の多かりしにぞ退校を命ぜられむと爲し渠また頗る悦喜して再び來らむと思ひしが、かのマルブッ伯は内外の事情を察し渠をこの悲境に陥せしは全く財囊の輕くして爲に輕蔑せられしことを知り、懇ろに退校を止めマダム、デ、フリエンヌと云へる貴族の婦人にナポレオンを托せり、今は第二の母を貴族に得たれば休暇或は祝日には其館舎にて貴女と遊戯に日を送り性情頗る和ぎ友愛の

情に温められたり、加ふるに亦た校内に於て小園庭を各自の所有として管理する規則ありしかば、頗る愉快に日を送るととなり、昔日のナポレオンにはあらざる如くになりぬ。

ナポレオンは斯くしてブリュンヌに日を送ると雖も、心は一日もコルシカのことを忘れず、故國のことを思ひ出づる時は父カルロがバオリに背き欺を佛國に通ぜしことを憤激し、「コルシカを佛國と併せしことは父なれども其罪赦し難し」と叫びたりと云ふ、故に愛讀の書はアルタイクの英雄傳に非ざれば、古代の人物傳にして羅句語は渠の厭思する科なり、數學と歴史と地理は渠の僻愛する課なりき、其遊戯も戰陣の法を學び世に傳ふる如く雪塊を以て戰爭の戲を爲すや、渠はコルシカ風の法を學童に教し、溝欄、砲台を設け指揮號令盡く數理と兵法に適ひ宛然小將軍の識量を具へしと云ふ。千七百八十三年八月に數學の一等賞を博し得たり、當時王室より派遣せられたる視學官デ、ケラリオは群童の中よりナポレオンを認識し、パリの本學校に進め海軍候補生に爲さむことを推薦せり、其時の檢定書には

ニム、デ、ボナバルテ(ナポレオン)  
千七百六十九年八月十五日生

身長一メートル五十九センチ、七十三ミリム、体格善し頗る健全にして性質温良なり、第四級を卒り、品行良し、數學最も優等なり、能く歴史地理を諳じ繪畫舞蹈音樂等は不十分なり、優等の海軍兵と爲す可し。パリの本學校に入校せしむるに適す。

當時の視學官も世にあらばナポレオンはケルソンを凌駕する水師提督となりしならむか、この視學官は其後間もなく世を逝れり、この人もし世にあらばナポレオンの運命も未だ海陸容易に定め難かりしが、天命は終に渠をしてパリの本學校に移らしめ砲兵科の學生となしたり、時は千七百八十四年の秋にして其齡十五なりき。

翌千七百八十五年はナポレオンの爲めに大兎の歳なりき、父カルロはモントペリルの寓居に於て二月二十四日胃癌の爲に世を逝ぬ、前にも述べたる如く名族と云ふ迄にして辛く世を渡り來りし後なれば、遺族は明日よりの計策なく、長男ジョセフは百事を抛ち未だ十七の小腕なれども母を助て家計の爲に働かんと決心せり、此時家には四人の子あり末のジョロームは滿三年の稚兒なりき、ナポレオンは貧苦骨に徹すれど助力を受けしマルブッフ伯さへも新婚の後なりしかば如何んども

爲す可き術なし、この不運の身にも趣味ありしはルソンの書なり、この逆境の地に同情を表するはルソンの書なりき、十六の少年の血肉は全然ルソンの熱血に温められたり、危哉々々。されど幸ひにナポレオンは其歳の九月に砲兵少尉に任じ、ウアーレンスの分營に遣されたり、渠は此時よりして生活の面目を一變す、當時の分營はラ、フェルの聯隊にして一週に三回の舞踏、二回の球戯と云へる有様なれば、將士はたゞ高給を貪り尉官十五年佐官十五年餘生は半額の給料を受けて世を過さむと思ふが軍人の目的なりき、ナポレオンの料は一ヶ年に千二百二十リアルなれど、七百二十リアルは寄宿料に費し僅に三十五リアルを(凡七ドル)一ヶ月の小遣と爲し之れにて衣服をも辨せしなり。渠は當時より盆中の趣味を會し女子と舞踏する愉快を知り紳士貴女の社會の優美なる會話を樂しみ、十六の少年士官は陶然として社會の春に酔へり、左れども例のルソンの書を読むことは一日も廢せず、鏗然たる佩劍の音を歌舞場裏に鳴らし、手にルソンの巻を放たず時に人世の悲觀を談じ社會の不平を論ず、渠は帝王の位に昇るか、悲觀的詩人となるか、任俠無賴の遊士となるか未だ判知し難き地位に立てり。

### 彼理提督の渡來と沖繩

條約 文學士幣原坦

回顧すれば天文十年七月、葡萄牙人豊後國神宮浦に漂着して互市を乞ひしより以來、泰西の諸國我邦と通交せんと試みたるもの鮮からず、而して其目的は、之を要するに貿易布教の二者に歸したりしが、徳川幕府は固く鎖國の政策を執り、寛永文政の嚴令にて、外國船は盡く打拂ふ可しと達したるも、天下の大勢に背馳して、我獨り孤立の位置を墨守するの難き、猶一腕以て大河の決するを防ぐが如くなれば、鎖國の永續せざるは誠に明白なる事なりしのみならず、我邦の航海商業に與れる者も、内心は外交禁制の緩綽ならんことを冀ふ輩これ無しとせず、已に南海に於て往々貿易の行はれたる形跡は、全く文献の徴す可きものなきにあらざるなり。而して我國の漂民にして、諸外國に流着する者ありし中に、黒潮に漂て亞米利加の岸に到れる者も尠ならずして、是等の難破船は多く合衆國人に救ひ上げられ、幸便に托して我邦に送還するの好意に出でられたるに、我邦にては亦例の貿易布教強請の口實ならむと慮斷して、徒らにその好意に背き、弘化三年五月、米船二艘相州浦賀に來りて通交を乞ひし時も、大久保因幡守の取計によりて、餘義なく食料薪水は給したるも、我國は新に外國の通信通商はゆるすこと堅き